

ああ旅順

香川県 小河 夕子

私は、明治三十六（一九〇三）年、香川県の高松市から十三キロ離れた香川郡由佐村（今の香南町）に、兄弟姉妹の次女として生まれ育った。父は宮大工の棟梁として、若いながら実績を重ねていた。今思えば中産階級の生活であったであろうか。母が一人の作男を使って自作農をしていた。

働き盛りの父が、大正七年に流行したスペイン風邪にかかって四十二歳で亡くなったその翌年、私は和裁の教科のある実業学校を卒業した。和裁はあまり好きではなかったが、その時代、小学校を終えて高等科すら行く子はあまりいない頃であれば、致し方のないことであった。

卒業を前に、北海道で小学校の校長をしていた叔父から、こちらで教員をしないかとの誘いがあり、母の

強い反対を押しきって、ただ一人で三日間の旅をして渡道したのは十六歳の時である。

十勝、帯広に近い音更村の小さな小学校の代用教員となった。悲しくなつて一人泣いたこともあったが、村で初めての女先生とあつて、村中で歓迎してくれたので、次第にこの生活にも慣れ親しんでいった。

白い布で頭を包んだ娘達が、広い畝の沈みゆく夕陽のもとで働く姿は、ミレーの絵のようで、北国の生活もそれなりに楽しかった。しかし私の年来の希望は閨秀画家であつたので、当時に名の知れた浮世絵画家の大家への再三の内弟子願いがようやく許されて、東京へ行くことになった。

一歳しい女中同様の内弟子生活にも慣れて、少しは絵の道も分かりかけた三年目。一度帰省した大正十二年九月に突然起こった関東大震災で、私の再度の上京は、もう母が許さなかつた。かくて私の画家への望みは絶たれてしまった。

そればかりでなく、娘が二十歳を過ぎるとすでに婚期は遅いとばかりに、縁あつて嫁いだ先は、さらに遠

い南満州、旅順の関東庁所屬の民政署に勤める官吏であつた。

こうして私の新しい生活が始まつた。

旅順は、世に名高い二〇三高地など日露戦争の肉弾戦跡の多い所でもある。はるばる着いてみると、夫の伯父もいとこたちもそれぞれ官職についていて、遠くやって来た私を快く迎えてくれたことは、大変心強く嬉しかった。

旅順の町は、新市街、旧市街の二つに分かれていた。新市街は主として官庁の街で、後に大連に移つた関東州庁などの要塞地でもあるところから、陸・海軍の施設のほか、考古学資料の豊富な博物館、工科大学、師範学校、女学校、完備された動物園、大運動場などがあつた。これらの建物はロシア時代に建てられた赤レンガや白亜のヨーロッパ様式の建築で、見たことも行つたこともないヨーロッパの風情はかくやと思つたものであつた。

旧市街は旅順港閉塞隊記念碑を港口に見、旅順駅から見上げる白玉山の頂には、戦没勇士の霊を祭る表忠

塔が空高くそびえていた。この山すそに沿つて商店街が開けていて、市場、劇場、寺院、市役所、民政署、高等法院（日本での裁判所にあたる）、銀行、郵便局、ヨーロッパの古城を思わせる旅順病院、そのほか重砲連隊、海軍要港部、広い敷地に塙で囲まれた関東軍倉庫があり、これより住宅地が広がつて支那街に通じていった。このあたりには土地の人達の信仰の対象である寺院の天后宮、京劇などの演ぜられる劇場、飲食店、雑貨を売る店などが賑やかに並び、商店の値段はその日その日の銀相場によるので高かつたり安かつたりした。

一時期、望んで丘の上にある中国人の幼稚園の隣の官舎に移り住んだ。近くに外堀を巡らせた現地人財閥の豪壮な屋敷があつたり、紅卍教会があつた。昔の日本にあつたような寺子屋もあり、揃つて御経を読んでいるような声や、パチパチと算盤の音も聞かれた。書道も盛んで中国の人は総じて字が上手だ。このようにして現地の人達の生活をうかがえたのは楽しかつた。

物価は案外安く、酒、煙草、砂糖、宝石類には税が

かかっていなかった。官舎はそれぞれの官位に相当したものが与えられて、備品もそれなりに付いていた。軍や官庁の高官、司法官ともなれば、ロシア時代の洋館にピアノまでがそなわっていた。

封建的な思想は、なかなか根強く残っていた時代で、日本人の職場でも身分の差は感じられたようだ。しよせん、大方の日本人は、中国人には戦勝者としての対応でのぞんでいたように思われる。日本人は労働者や汚れ仕事に就く人はいなかったようだ。

各家庭には、毎日満人（当時中国人たちをこう呼んでいた）の御用聞きが菓子その他の商品の見本を持ってやって来た。雑貨屋はほとんどの物を用立てしてくれるので便利であった。また、親密になって子供たちにも好かれ人気があった。魚、野菜も天びん棒をかついでひょうきんな身振りで売りに来た。街の通りには、至る所に洋車（ヤンチョ・人力車）や二頭立ての馬車（マーチョ）が何台も客待ちをしていて、料金はとても安かった。

こうして旅順での生活は大変快適であった。私の家

では、子供が小さい時はなにかと手がかかって人手が欲しかったので、時には使用人として男の子（ボーイ）や女の子（クローニャン）を使ったこともある。とても人なつこくよく働くので、家族同様に扱ったため、「父親（フーチン）、母親（ムーチン）一様（イーヤン・同様の意）」と喜んでくれた。私は今でも、日本人のところに嫁にゆきたいと言っていた可愛い姑娘（クローニャン）を忘れることはできない。

幸福に暮らしていたが、突如として夫が胸を患った。空気が乾燥しているせいかこの病にかかる人はまま聞かれた。肉や野菜をはじめ食料が安かったので、栄養にはこまかく気を使い、開放性ではなかったのが幸いし、休養をとりつつ夫は勤務を続けていた。この時私は、行く先を案じ、昔学校で嫌いなたまらなかつた和裁の内職を一念発起で始めた。古いノートを引張りだしたり本とも首っぴきで勉強し直して、呉服屋から仕事をもらえるようになった。

しかし、官舎住まいで内職など一人としてする者はなく、また暗に日本人、それも官吏の体面もあった時

代だった。しかし私には男の子が三人もいたので、そのようなことにはこだわっていられたかった。学校時代には先生も手を焼いていた私の和裁だったが、人間困った時にはできるもので、次第に振り袖も男袴もほとんど何でも出来るようになり、果ては和裁を知らない主婦達や、嫁入り前の修行を望む娘さん達に教える塾のようになってしまった。このことは後に私たちの引揚げ後の困窮した生活で世過ぎの一助ともなり、また教えてあげた人々の中には、戦後これで生活を支えることができたと嬉しい感謝の便りをくれた人もいた。

幸い、夫の病気も案じた程のこともなく快方に向かい、私の家にはいつも賑やかに人の出入りが絶え間なかった。親類同然につきあう幾家族かもできて、春は花見に、夏は海水の綺麗な黄金台海岸へ連れ立って出かけ、海水浴で半日過ごした。秋ともなると、日露戦跡の東鶏冠山、松樹山などで初茸がたくさん採れた。冬になると、子供達は待ちかねたように凍った池でスケートに余念がなく、小さな子供達でもすぐ上達して

いった。冬の夜は親しい家族同士が寄りあっては、赤々と燃えるストーブを囲んで楽しく過ごし、焼き栗の行商の売り声を耳にしながら、夜の更けるのも忘れて語りあうなど、子供達にとっても忘れ得ぬ懐かしい旅順であった。

しかし、平和に見えながら世の中は刻々と変わりつつあった。昭和二年頃から金融恐慌時代に入り、四、五年の頃には、「大学は出たけれど、悩みは果てなし」と歌われた不況のどん底となって、日本内地から、満州へ満州へと人々は押しかけてくるようになった。

昭和六（一九三一）年の柳条湖事件から次々に起こっていった変事や、誰もが周知の無惨さ言うべくもないが、私たちの知らないところで国策が進められてゆき、満州国の帝政樹立で薄儀執政が皇帝として、旅順大ホテルで名を挙げたのであった。

また十一年には、満州での農業開拓が企画され入植が進められた。折から緞に信玄袋を担いで入植地の佳木斯に赴く前に、旅順の戦跡地を訪れる少年義勇軍を、私たちは国防婦人会のエプロン褌姿で旅順駅に詰

めて接待したものであった。

次第に軍事色も濃くなってゆき、日本軍はひたすら中国の奥地へと進出していった。ちまたでは日の丸の小旗を振って出征者を送る日々が続くようになっていったが、誰も涙は見せなかった。日本精神高揚を主旨としてか、新市街に官幣大社となる関東神宮の造営が始まった。労力奉仕の団体は全満州から次々と参加した。むろん私たち地元の人たちも参道の玉石を運ぶ奉仕に駆り出され、翌朝は腰が痛くて起き上がれない程の重労働であったが、国のためという思いから誰の口からも苦情は聞かれなかった。しかしこれは完成を見ずに終わった。

満州国が出来たことで夫の勤め先の役所からも、我も我もと、満州国の首都となった新京の新しい官庁へと移っていった。もはや日本の勝利を疑うものは無かった。日本本土から学徒出陣で集められた若者たちの激しい訓練が市中でも見られるようになり、ついに我が家の次男も中学校の仲間十数人とともに海軍の飛行予科練習生として鳥取の航空隊へ入隊してしまっ

た。

ラジオのニュースはいつも我が軍大勝利であった。すでに食料その他日用品はすべて配給となり、菓子など甘味品はなかなか口にすることがなくなった。たった一つあったダイヤの指輪を献納して見返りにもらった角砂糖と、工面してこしらえた菓子などを、美保航空隊の息子のもとに送ったが、息子の手には届かなかった。軍隊の生活でも不自由が生じていたことを、どこからとはなく耳にしていたが、息子から期待していた物が届かなかったと言ってきた時は、泣けて仕方がなかった。

私たちの住む旅順に、戦地から傷病兵がしきりに送られて来るようになり、私たちは軍の病院へ看護の手伝いに駆り出された。また、関東軍倉庫での武器輸送の手伝い、その間には竹槍や火消しの訓練に明け暮れた。

ハワイ真珠湾攻撃に始まった戦いは戦線が拡大するにつれ、いよいよ熾烈となった。国中、父が征きさらに兄も弟も征くという状態になっても、ラジオは勝ち

戦ばかり報じていた。

そのうち学校の教師も、役所の若い職員も、医師も、出征して行った。果ては、四年生以上の中学生も何の武器もなく駆り出され、女学生も希望によって看護婦として幾人かが徴用されていた。私の知人の娘さんも応募したまま、ついぞ帰ったという話は聞かなかった。

使役に出た関東軍の倉庫には、あまり武器があった様子はなく、残っていた砲弾を街から離れた山の中に隠べいする仕事に携わったりもした。看護の手伝いに行った衛戍病院の看護婦には毒薬が渡されていることも知ったが、それでもよもや戦争に負けるとは思ってもいなかった。

そして昭和二十年八月十五日の玉音放送。長男は医学生であったためか徴兵も猶予されていたが、この日ついに、ソ連軍の侵攻に対して戦うべく赴くことになり、水盃を交わすその時であった。みなうなだれ無言、そして落ちる涙。はやくも隣組班長の通達によれば、何とソ連軍の指示により、ラジオ、ミシン、刀

剣、自転車など機械類はことごとくソ連軍部に差し出すことになった。病院、歯科医院などの設備は接収というより、もはや略奪であった。これらは、鉄道で北へ向けてどんどん運び去られたと聞いた。

三日と経たない間に、家の外にはフライパンを背にしたソ連の兵士、頭にリボン、足は裸足に近い身なりの女兵士、自動小銃を肩にした少年兵士が街にあふれ、野宿したのか、我が家や近所の家の周りは糞尿で鼻持ちならなかった。油断しているとソ連兵が家の中に土足で入ってきて、「ダワイ、ダワイ」と言いながら、まず我々の身につけている腕時計を取り上げ、万年筆その他めばしい物も皆持っていった。

やがてソ連軍上層部の指令があったのか、少し沈静してきた。間もなく、不穏な中国人の襲来に備えるためにと少年兵一人を番人につけてくれることになった。しかしこれは、この家を接収する前に荒らされるようにするためのものであったようだ。この少年兵は子供供していて、下着に隠し持っていた十字架を密かに見せてくれたり、「ママ」と言って母親らしい

写真を見せてくれたりして、憎む気にはなれなかった。

その後、三人の将校とおぼしき軍人がやって来て、私たちは彼らと同居するようにならなくなってしまった。しかし、この兵士たちも意外とおとなしく、どこから持ってきたのか、部屋に金屏風を立て、悦に入っていた。「チャイコフスキー、スターリン、オーチンハラジョー（とてもすばらしい）」と親指を突き出して見せ、日本がもう三日間頑張れば勝てたなどと、夫の肩を叩いて好意を見せるのだった。彼らに個人的に接していると親しめる好人物であるのに、ソ連という国のやることは不安で怖かった。

海軍の要港部に同県の知人が居て、施設の中の食料を開放するから早く取りに来るようにとの知らせがあった。お向かいの田中さんのご主人と吠三俵の米を梯子にのせて持って帰ったが、間もなく押し寄せた群衆によって持ち去られてしまい、再び取りに戻った時は既に何もなかった。

街は少し落ち着いたかに思われたが、明日からの食

べ物が心配だった。預けていた銀行も閉鎖されて、所持金も心細くなり、金に変えられそうな所持品を、近所の奥様たちと、次から次へと街へ売りに出た。初めは辛く恥ずかしかつたが、トランクと差し当たり必要な着物も売った。役所から払い下げられていた外国製の計算機は、貴重品とあつて高く売れた。

ある日、長男がくたびれ果てた顔をして帰って来た。友人の斧出君が奉天の親元へ帰るので、友人の小田恒夫さんと旅順駅まで見送った後、通りを歩いている通行人と共に銃を構えたソ連兵に挟み打ちにされて埠頭まで連行されたそうだ。停泊している船の中へ連れ込まれて、十数人の中国人に交じって荷役仕事をさせられた。三時間ほど経った昼過ぎ、ソ連兵の姿が見えない時に、友と船底から抜け出して脱兎のごとく駆けだしたところ、それに気づいた中国人たちも後に続いてきたため、騒ぎに気づいたソ連兵が発砲しながら追いかけてきた。そこをようやく逃げ帰ってきたのであった。小田さんはその後夢にうなされることしばらく続いたと言っていた。

旅順は日本人にとって次第に住みにくくなり、ついに我が家は接収されて一、二日の猶予で立ち退かされてしまった。旅順の日本人はすべて大連に強制的に移されることになったのだ。しかし夫の勤め先が水道の部局であったために、引き継ぎがなかなか出来なくて、まだしばらく留まることになった。まだ留まっている知人の家族と、共に住める家を探した。空き家になった所に移ったが、前の住人が慌てて大連に去って行った様子は、残された家財からもうかがえた。このようにして移った先の家もまた立ち退かされることを三度四度と繰り返して、その度に持ち物は少なくなっていくので、残っていた古新聞を敷きつめて住んだ。かくて遂に、日本人はソ連の必要とする人たちを除いて、皆大連へ強制的に移住させられることになった。

街中の商店の老いた女主人が、毅然として命を絶つたというのを聞いて、この地を生涯の故郷と決めて暮らしてきたのが、一朝にして瓦解したことからの覚悟

のことであったかと胸が痛んだ。

軍人はもとより、市長、民政署長、警察官など全て集められ、シベリアに送られる結果になったことが人々の噂にのぼりだしたのは、それほど後のことではなかった。

私の夫の残務引き継ぎはいつになるかわからなくなり、とりあえず私たち家族は、夫一人を残して大連の指定された家に引越すことになった。幸い、留まるよう指名された旅順病院の笠原院長はじめ数人の日本人は、与えられた家で共同生活をするようになった。もっとも私たちが残れたとしても、街は日中でも森閑とし、夜ともなればソ連兵が強盗まがいに戸を叩き、とても住める状態ではなかった。女の人たち、特に若い娘さんたちは、わずかの物音にもおびえて床下に隠れるという毎日が続いていた。

新市街に住んでいた、親戚のように古くから親しかった先田さんが、娘婿の北満出征を心配して、大連の娘孫の元に行ったのは八月の初めであった。留守宅がそのままであったのを思い出し、長男の友人たちが

ちようど大連に行くという時であったので、内地から仕送りの途絶えた彼らにアルバイトを頼み、残された必要家財を運び出した。この荷物は三男が馬車を雇い、途中襲われかねない危険を冒して、大連の先田さん宅へ運び込んだ。

我が家の荷物（布団、これだけはと確保していた衣類、煮炊きに必要な鍋釜の類、食料）と、共に行動してきたお向かいの田中さんとの二家族分の荷物を、知人の中国人の于さんの馬車に載せ、再び共に住むことになった大連初音町の奥野さんの家を目指して、旅大街道を東へ向かって行った。

残務整理で残る夫が、立場が逆転した中国人の下で、どのような生活をするのか案じながら、私は旅順を引き払う他の日本人たちと無蓋貨車に乗り込んだ。この中には、病人も老人も臨月らしい妊婦も居た。雪は降ってはいなかったが、走る列車に十一月の風は冷たかった。

途中、鉄橋の下で、ソ連兵に捕らわれ使役させられている日本兵士の姿を見て、私たちは持っていた物を

手当たり次第に投げ下ろし、「兵隊さん頑張って」と叫んで手を振るのが精いっぱいだった。

こうして訪ねて行った初音町は、電車通りと川を隔てた高台で、奥野さんの家は大きな構えの家であった。人けのない表通りで、だれかたき火でもしていたのか、チロチロとわずかに燃える火の色の何とも頼りげない様が、なぜか今だに私の日に焼きついて離れない。

奥野さん宅は、大連の繁華街にある呉服類の大きな卸問屋のご隠居が、女中と住む別宅だった。地下室には暖房用の大きなボイラーがあり、五つばかりの部屋と、温室にはラジエーターのある立派な住まいであった。しかし、暖房は停止していた。本宅から毎日この家の主たちに食事が運ばれていた。近江商人の豪商であったこの主のご隠居は、とてつもない好人物で、四世帯同居となったのに不愉快な顔一つ見せず、引揚げの日まで気持ちよく親密なまでにつきあってくださり、感謝のほかはなかった。

私たちは、ここに住み始めたその日から、この先を

どのように生きてゆくかが課題であった。時に食料として配給される皮のついた高粱（コーリヤン）を、釜いっぱいの水で粥にして食べた。それに何とか収入を得なければと、仕立て物の経験を生かすことになった。縫い物の絹の端切れをたくさん持ってきていたのが役にたつて、赤い布は四角に十字の線縫いをしてハンカチにした。これはソ連の女たちが喜んで買った。また人形なども作つたが、これも大広場に持つて行くとき、セーターの古い物を買つてきて、私と長男がそれをほどこいて洗い、持っていた染料でいろいろと染めてターバンをたくさん編んだ。これは当時はやっていたので、これまたよく売れた。支那街にまで出掛けて「ニーハオ、テンホー（あなた綺麗、似合うよ）」とお愛想を言えば、気前よく二つも三つも買ってくれた。長男は友人の小田さんと一緒に、夜明け前に野菜の卸市場に出掛け、買い付けのための手指での符丁も覚えてリングなどを仕入れ、賑やかな通りの道端で声を張り上げて売つたりしていた。

また三男が買ってきた葉煙草を刻み、英語の辞書の紙で、手製の手巻き器具を使って紙巻き煙草に仕上げた。これを紙箱に詰め、板の上に並べ、紐で首から下げて、電車の乗り場などで売り歩いた。かっぱらいの子供たちを見ると、すかさず風呂敷を被せて防いだ。また人から依頼された衣類を持つて、大広場、西広場に売りに行った。ここでは小説「人間の条件」の場面そのままに、大勢の人が何枚もの衣類を腕に掛け、両手いっぱい広げて並んでいるところへ、買い付けの中国人、ソ連兵が大きな袋を持つて買いに来た。その取引に駆け引きがあつてまた面白い。五千円で売りたいものをまず一万円とふっかける。買い手は千円と叩く。盛んなやり取りの挙げ句、だいたい五千円に落ち着く。中国人に雇われた日本人の娘さんに、値段の折り合いがつかない時は、サクラの中国人が値をつけて客を煽っている。しばらく続けていると、このように裏の様子がわかつて、辛い日々にもクスリと笑わせることもあつた。

品物を抱えて行く途中、陶器の大皿を抱えたまま撃

たれて、足を突き上げて死んでいる男性を見たり、中山公園に三人の首吊りがあったとか、学生が殺されていたなど、幾たびも見聞きした。

そうこうするうちに、幸い夫も旅順から脱出するこ
とが出来たが、やせ細って帰って来た。

時に夫が物を売りに行くこともあったが、口が不調
法なこともあって売り物をいたずらされたりして、ど
うも商いが苦手の様子なので、その後は専ら私の出番
となった。

この状況の下では、以前どのような高官であった人
も、その夫人も皆同じで、食べていくことに血眼と
なって、広場へ物を売りにやって来た。戦時下ではほ
とんど見られなかった米や肉も、高い値段ながら巷に
顔を出してきた。寿司、うどん、そば、はてはぜんざ
いまで売る露天の屋台が連なっていた。

ある時そのような屋台の並ぶ界限を、剣をさげた日
本の将校と連れ立って、ソ連の上級将校と見られる軍
人がやって来た。この時、一人の中国人が、いきなり
罵声をあげせながら日本の軍人に何か物を投げつけ

た。すると、ソ連の将校が素早く日本の将校にピスト
ルを握らせ、それと同時に一発の銃声が響いた。あた
りに居た日本人たちは思わず歓声をあげ、今の自分た
ちのおかれた境遇も忘れて拍手をした。日頃鬱積した
思いでいた私も、何とも胸のすく思いであった。

月日の経過と共に、大連の街では毎日何かと事件が
起こった。八路軍と国民党軍、ソ連兵と米国兵が入り
交じって、あちらこちらでパンパンとまるで西部劇そ
のままの中で、他人事のように物を売り買いする修羅
の世界であった。

しかし私の経験した悲惨なことは、ターバンを売り
に行った時のことであった。やせて骨と皮だけになっ
た二人の少年が、私の目の前で倒れた。私と通りすが
りの女のひととで、「しっかりして、もうすぐ日本に帰
る船が来るのよ」と叫び、持っていた餅子（ピンズ・
コーリヤンのパン）を握らせようとしたが、少年らは
すでに握る力もなく、失禁もしていた。何かとものぞ
いていた中国人は、「あいやー。日本人死了」と表情
も変えずに通り返して行った。敗戦後、旅順から命か

らがら北上して、大連までようやくたどり着いた少年たちのうちの、誰かではなかっただろうか。今でも、なぜせめて国元と名前を確かめておかなかったのかと、悔やまれてならない。

私の知人の甥御さんは中学一年くらいだったが、父が戦死、母は病死して、伯父さんの家に来ていた。私が街で見かけた時は、中国人の行列の中で長い旗持ちの仕事をしていた。しかし、その脚は大根のように水膨れし、さらに足首からは膿が垂れていた。栄養失調だったのだろうが、私にはどうするすべもなかった。

また私のごく親しい人の親戚では、父が応召で帰って来ないため、二人の兄妹は、可愛がってくれていた中国人の家に行ってしまったそうだ。残留孤児の記事を見る度に、あの子達は帰って来ただろうかと心当たりを探る毎年である。

たとえ大連で死んだとしても、当時火葬にするのは大変なことで、燃料を山ほど調達して、死体とともに手車に載せ火葬場に運んだ。それもかなわない時は、ひそかにどこかに埋めに行くのであったが、葬式も出

せずに、わずかな人たちが手を合わせて送るのであった。

明日の日は私の骸か物体の

ごとく手車に曳かれ行くひと

捕らえられたり、悲惨な目に遭ったのは日本人ばかりでなく、中国人の中にも日本に協力したとして漢奸呼ばわりされて、広場などで人民裁判にかけられていた。罪状を書いた紙を胸に街中を引き回され、果ては市民という群衆の裁決によって罪を科される。この時群衆の投げる石に身を任せているのを見るのは、何とも痛ましいことであった。それでも中には、堂々と悪びれずに歩く中国人も居て、密かに涙したものであった。

旅順で起きていたことと同じ事が、ここ大連でも起きていた。金たらいをけたたましく叩く音がすると、近所中の男は音のする家が集まる。ソ連兵が女を探して侵入して来たのだ。集まって来た男たちは何の手出しも出来ないが、大勢の目でジーンと見つめることでソ連兵が去って行くのを待つという情けない戦法で

あった。

夫の同僚だった三好さんは大連の本庁に勤めていたが、大連に腰を落ち着けるつもりで家を建てた。しかし終戦になり、家は大連の新政府に取り上げられ、楽隊の鳴り物入りで入居してくる中国人を、旗を振って歓迎しなければならなかった。戦争とは、敗北とは、かくも哀しいものか。この時引越しをさせられた家はとても住めるような代物ではなく、トイレにいたっては板が二枚渡されただけであった。

佳木斯から逃げて来た集団にお産があるというので、知人の産婆さんと収容先の小学校へ行った。この人たちはもう喜怒の感情さえ失い、傍らの人が死んでもただうつろな表情で見ているだけであった。端正な顔立ちの女性が、麻袋の端から顔を出した姿で物乞いをして歩いていた。私は「乞食だけはほしないで」と叫びそうになったが、口をつぐんだ。「それではどうやって生きてゆけばよいの」という言葉が返ってきた。うに思ったからだ。

敗戦後一年を過ぎると、いくばくかの持ち物はあら

かた売り払ってしまったので、物を仕入れて売るようになった。子供たちは箱に入れた僅かの煙草を人込みの中を売り歩き、大人は白酒（パイチュウ）の一杯売りで一日の口銭を稼いだ。身寄りの無い学生たちは、チューリン百貨店（三越デパートの名称がそう変わっていた）のショーケースを一ケースずつ借りて、安く買ってきた品や委託された物品を、にわか覚えのロシア語で、物欲し気に品漁りにくるソ連人たちに売っていた。塩が高いとなると頭の良い人は岩塩を仕入れてきてすり鉢で細かく砕いて売っていた。私はその頃は要領も覚えて、どこで仕入れたか忘れたが、もろみを手に入れ、アパートの階段を上がり下りして一軒一軒売り歩いた。

街のあちこちで、日本からの迎えの引揚船が来ると噂されるようになった。そのたび衣類は一人三枚だとか、お金は一人千円と聞き、残りの着物を売った。貯金通帳と印鑑の売買も行われ、引揚げが延びると買った通帳を売らねばならなくなり、このようなことを繰り返しているうちにとうとう何も残らなくなってしま

う。

昭和二十一年秋になった頃、待ちに待った日本への引揚げが始まったが、私たちにはなかなか帰国の知らせが来ないまま、再び年が明けた。

やっと私たちにも引揚げの指令があつたが、今まで幾度となくだまされてきただけに、船に乗るまでは信用出来なかつた。二月十一日、既にひっそりとした家々の間を降りしきる雪の中、防空頭巾にリュックサックの人たちが集まつた様は、シベリアへ送られる流刑囚さながらだつた。この時、顔にマフラーや布きれを巻いて顔を隠した日本人とおぼしき一団が、帰国しようとする人々を取り巻き、日本人労働組合と称して声を張り上げて演説をぶち始め、その揚げ句に持ち金が多いといつて片っ端から取り上げていった。この連中は主義思想とは全く無縁の、引揚者を食い物にした情けないふていしの日本人の群れだつたように思われる。

幾台かのトラックで運ばれ、大連埠頭の一時収容所に入ってからが大変であつた。日本語の達者な女の兵

士を交えて、人間と証明書の照合、荷物の検査が進められた。ストップをかけられると、あらかじめ用意した幾枚かの紙幣を、止めた兵士の手にすかさず握らせる。そうしないと荷物を開けて目ぼしいものを引き抜かれる。こうして引揚げ船が来るのをぎゅうぎゅう詰め の部屋で待つた。

乗船するため埠頭の長いホールに連れ出された時、嫁いで来た時や、子供たちと夏休みの旅の船出に際してここを歩いたことを思い出し、これも見納めだ とつぶやいた。並んで乗船を待つ私たちの肩やリュックサックに雪が降り積もつた。船室に荷を下ろすや否や引揚者たちは皆雪の甲板に駆け上がった。船はドラも鳴らさず静かに大連埠頭を離れた。次第に遠ざかる大連、そして旅順の地を、去来する思いを胸に抱いて、船は進んでいった。

やっと三日目、日本の島並みが見えた時の感激に、ああとうとう日本に帰れたと皆甲板に上がって手を上げて涙した。

着いた佐世保の港には撃沈された軍艦が横倒しに

なっていたり、建物の残骸があちこちに見え、戦いの激しさに我が故郷もかくやと不安がよぎった。スピーカーから流れる小学唱歌「故郷」に、そして迎える方の丁重な労いの言葉に目がうるみ、嗚咽の声もあつた。

ここまでようやくたどり着きながら、亡くなった人のあつたことは何とも痛ましい限りであった。帰還列車は身動きも出来ない大変な混雑であったが、駅々では学生さんたちがとてもよく世話をしてくださつた。

ようやく着いた、夢にまで見た郷里高松の町は、見渡す限り焼け野原となり、家の影すらまばらだった。捜し当てた私の母の家も焼けてしまつていたが、母も兄夫婦も幸い無事であった。焼け残つた一軒の持ち家、新井から先に引き揚げていた妹と二人の子供と、特攻隊から復員して来た私の次男も、無事に帰国して住んでいた。この四世帯の多人数に耐えかねて、夫の弟の家に移つたものの居心地悪く、やつと借りた借家は雨漏りする杉皮葺きのひどい家であったが、気兼ねのないのは何よりであった。

こうして落ち着いたものの、気苦勞と食生活は大連と少しも変わらなかつた。遅い引揚げだったため、夫の勤め口もおいそれとは見つからず、すべて私の出番となつた。一文のお金も無い中を、医学の勉強を続けさせるべく長男を岡山の大学へやり、次男は兄の工務店で働かせ、三男はつてを求めて地元の電鉄に就職させたが、病を得て入院療養するなど私の苦勞は筆舌に尽くせぬものであつた。

ヤミの行商で警察に捕まつたり、子供相手に一文商いの店を開いたり、勤め人相手の食堂、仕立て内職、薬局の店員など、何でもやつてきた。しかし私は、人様にも恵まれよく助けていただいたおかげで、若い頃遂げられなかつた日本画にも励むことができた。八十六歳から文芸作品にも手を染め、老いても生き甲斐を持ち自ら励んでいる人を支援する団体の「香川あすなろ協会」主催で、詩画作家の方と二人展を開いていた。健康でまだ現役を自認して、今も九十五歳で頑張っている。

ちなみに、長男は、なお医の道にこそし、次男は

私の亡き兄のあとを継いで建築工務店を経営、三男は
自営業で、独り暮らしの私にはいつも気を使ってくれ
るなど昔の苦勞は嘘のような日を送る幸せな毎日であ
る。

夫は四年前、九十八歳で大往生を遂げた。